

1. 授業の基本情報

報告するのは、学校教育教員養成課程の「言語文化特論」。対象学年は1～4年、複数回受講しても単位を認定する国語教育の中では特異な授業で、外部講師による集中講義のために設置した科目であった。それゆえ特定の領域を指定しない「言語文化」とした。しかし、外部講師をお願いする余裕はなく、実質は、国語科教育、国語学、国文学、漢文学、書写書道の一つに収まらない内容を取り上げ、4年に一度は開講する科目である。

授業評価のポイントとして「地域社会を核とした教育と研究のつながり」が掲げられた本年度、「言語文化特論」はまさにその工夫が可能な科目であると判断し、実施し、報告することにした。

本年度の授業題目は「愛媛の文学と愛媛方言」、授業の目的は「愛媛県の中学校高校の国語教員として理解しておくべき愛媛の文学と方言との関わりについて、実際に文学作品の舞台を訪れ、知識・理解を深め、探究し、他者に伝えられる力を身に付ける」とした。

愛媛の文学の全体を半期で取り上げるは無理であるため、担当者がこれまで研究対象としてきた夏目漱石の『坊っちゃん』を中心に取り上げ、そこで用いられた松山方言と、舞台となった松山を実施踏査し、『坊っちゃん』と松山について、テーマ・課題を見つけ、調査・研究した成果を発表するという「授業概要」を掲げた。

対象学年は1～4年だが、全学年の空いた時間帯はなく、本年度の受講生は、3年生4名（中等国語3名、小学校サブコース1名）、4年生4名（中等国語2名、小学校サブコース2名）、計8名だった。

2. 授業の内容

第1回は、「文学作品と舞台」「愛媛を舞台とする文学作品」について概説した。

第2回以降、前半は、『坊っちゃん』について、執筆に至る経緯、自筆原稿から全集・

文庫本、国語教科書までの本文揺れ、使用された松山方言の確認とその役割などについて取り上げた。松山方言の役割については、司馬遼太郎の『坂の上の雲』も取り上げた。

市内実施踏査については、天候のこともあり、『坊っちゃん』に関わる場所、関係する人物の居住地などの紹介にとどめ、それらには各自で訪れることとした。一方、文豪漱石の産みの親とも言える子規について学ぶため、全員で子規記念博物館を見学した。ここでの研修によって、研究対象が『坊っちゃん』から広がることになった。

後半は、戦前と戦後の代表的な映画『坊っちゃん』を観た。ストーリーや人物像、言葉遣い（方言）の原作との違いをチェックした。受講生は、松山市民を含め、現代人の『坊っちゃん』についての知識やイメージが、原作よりも戦後の映画に強く影響を受けていることを知るようになった。

子規記念博物館訪問から、漱石自身が俳人だったことに絡め、当初のシラバスから外れるが、松山市内の句碑について取り上げることに変更した。『坊っちゃん』自筆原稿の説明で、明治の文字・表記が現代と異なるルールで行われていることを取り上げたが、俳人自身が書いた俳句を刻んだ句碑と、その解説文の俳句の文字・表記との関係を皆で考えてみた。これは地方文学の研究から、日本語研究に引き戻したもので、授業内容の変更となったが、日本語研究と地域文学との融合ということで許されると判断した。

受講生は、最後に各自テーマを設定し、それについてレポートを提出した。

受講生2名が、7月27日に開催された「松山坊っちゃん会夏季講演会」に参加した。この会は、中学時代に夏目先生に直接教わった桜井忠温氏を名誉会長として発足した市民の会である。現会長も元会長も元高校国語教員、会員には現職の中学国語教員もいる。そこに国語教員の卵である大学生が参加し、木藤隆雄氏の見事な話術の面白い講演が

聞けたのは、「地域社会」とのつながりとして特筆すべきことだったのかもしれない。

3. 授業評価の内容

学生の授業評価アンケートは、自由記述とした。以下に主なものを挙げる。

○学びが深まった点

・子規記念博物館見学や、松山坊ちゃん会への参加を通して、地域で発展してきた文学について、より身近に感じることができた。

・坊っちゃんの直筆原稿を読み取り、どのような編集が行われたのかを考えることで、直筆の価値にも気づくことができた。

・「坊っちゃん」をメインとした授業展開で、松山方言や正岡子規についての知識が深まったと感じました。初めて子規記念博物館にも行き、授業や知識としてだけではない実物を見てより子規を感じ、学びが具体的になったと思います。卒業研究の面でも松山方言に関する内容は参考になりました。

・句碑の問題点について知ったことで、句碑の文字や書いている内容、解説等を意識して見るようになった。

・1番楽しかったのは『坊っちゃん』の直筆原稿を見る活動です。漱石の筆致と虚子の筆致を見比べたり、文庫化されているものと見比べたりして『坊っちゃん』をこれまでよりも身近に感じることができるようになったと思います。

○改善点、もっとこうしたいと思う点

・映画の坊っちゃんと原作のストーリーの違いを比較しながら見るのが面白かったため、もっといろいろな坊っちゃんのストーリーを見てみたいと思った。

・強いて言うなら少し遠出をしてみたらまた違った授業になったのではないかと思います。

・複数回履修が可能と言うことだったので、4回生の前期でも履修したいと考えています。

4. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

今回報告する「言語文化特論」は、まさに「地域社会をフィールド・対象とした研究（教育）」の取組をそのまま実践できる授業科目であり、こうした科目を活用することが必要であると痛感している。

言語文化、文学という点でみると、愛媛・松山は「宝庫」であるといえる。贅沢な環境

で学んでいることを、教育学部生はどれほど理解しているだろうか。それが不十分だとすれば、それはわれわれの責任であると思う。

報告者は、これまで地域素材である愛媛方言や『坊っちゃん』を研究対象としてきた。研究においては、愛媛方言で生じた現象を方言研究としてどう考えるか一般化できるか、漱石の文字・表記の特性から日本語の文字・表記の変遷や特徴の解明へ、そういうスタンスである。そして、地域素材についての深められたことを、将来地域で教員となる学生に還元する。これまで、決して満足なことはできていないが、地域の研究と地域教員の養成とは一体化でき、まったく無駄がない営みであると考え。ただし、教員採用試験で、こうした学びの成果が評価されることが必要だとは感じる。地域への理解の深い教員が必要なら、この流れはしっかりしたものとなる。小学生から大学生まで、方言に興味を持つ若者は多いのに、学習指導要領では方言の記述は小さい。方言への興味は、母語への興味の中核をなすはずで、「主体的・対話的で深い学び」の言語活動としてぴったりだと私は考えている。

5. 総括

学生評価にあるように、もう少し遠くまで足を伸ばす内容にしたかったというのが反省である。『坊っちゃん』から子規へ、俳句へとずれてきたように見えるが、子規こそが文豪漱石を生み、漱石は子規のために『坊っちゃん』を書いたという私見（「子規と『坊っちゃん』」子規記念博物館夏季子規塾2019年7月21日）を、授業の冒頭近くで提示したことからすれば、想定内のズレであるとお許しいただきたい。

7月、サクラメント州立大学の学生さんたちが本学を訪問されたとき、この授業を見学していただいた。「俳句」「句碑」「漢字か仮名か」といった内容に興味を持っていただけたようだ。外国からの来訪者に対して日本文化を紹介する際、松山はほんとうに素材が豊富である。今回見学いただいた授業を、もし英語で実施できていれば、日本文化の面白さと松山の魅力を、もっと直接に伝えられただろう。報告者にはできないことだが、国語以外の教員を目指す学生のお役にも立てるのではないかとったりもした。